

第 158 回東邦医学会例会予稿

6 月 16 日(水)

A. 大学院生研究発表(No.1-2)

1.

17 種類の腫瘍関連抗体を用いた stage0/I 乳癌の血清学的診断法

須磨崎 真(代謝機能制御系臨床腫瘍学), 指導教授: 島田 英昭(臨床腫瘍学講座)

Seventeen recombinant proteins were applied as capturing antigens in sandwich ELISA to measure serum IgG levels. TAA in breast cancer patients may be useful for early detection. However, seropositivity of breast cancer reflects the tumor characteristics but not the disease stage.

2.

診療参加型臨床実習後(Post-CC) OSCE におけるステーション内評価者間一致度の検討

高山 充(社会環境医療系医学教育学), 指導教授: 廣井 直樹(社会環境医療系医学教育学講座)

医学部 6 年生を対象とした Post-CC OSCE の成績評価には 6 つの評価項目を用い, 同時に二人の評価者が学生を評価している。今回, 成績評価の信頼性をステーション内の 2 評価者間の差異の視点から評価したところ, 全評価項目において κ 係数 0.1-0.2 台, 級内相関係数(pearson) 0.2-0.4 台, 単純一致率 46-49% 台と, ステーション内での大きな差異が明らかになった。また成績評価点数に, 評価者の職位は有意に影響していなかった。

B. 研修医発表(No.3-6)

3.

アテゾリズマブ併用療法後に重症筋無力症を発症し,ステロイド治療などにより改善し得た肺腺癌の 1 例

今井 杏里(大森初期研修医), 指導: 吉澤 孝浩(内科学講座 呼吸器内科学分野 大森)

症例は 75 歳男性,右下葉肺腺癌 (cT4N3M1b stageIVA) に対しカルボプラチン+ペメトレキセド+アテゾリズマブ併用療法を導入し, 3 コース後に日内変動を伴う頸部筋力低下, 複視, 嚥下障害, 血清 CK 値上昇を認め, 筋炎を合併した重症筋無力症と診断した。診断後,ステロイドパルス療法, タクロリムス, 免疫グロブリン療法の併用療法を施行し重症筋無力症が改善した貴重な 1 例を経験したので報告する。

4.

感染性腸炎の一例。

相川 萌子(大森病院研修医), 指導: 小松 史哉(総合診療内科)

発熱・下痢・腹痛を主訴に来院した 21 歳男性。感染性腸炎の診断で入院とし腸管安静のみで軽快を認めた退院となった。
感染性腸炎の原因として様々であるが, 抗生剤加療が必要な感染症もある一方で投与による合併症も報告されており, 感染性腸炎に対する抗菌薬加療について文献的考察を加え報告する。

5.

血球貪食症候群を呈した一例

篠原 朋(大森病院研修医), 指導:小松 史哉(総合診療内科)

発熱・喋りにくさを主訴に紹介受診となった既往歴のない 38 歳男性。
各種検査施行し血球貪食症候群の可能性が高いと考え、抗生剤・ステロイドにて加療開始し、血液内科にコンサルト・転科とした。その後、ステロイド治療は奏功し退院となった。
血球貪食症候群の原因や疑うべき所見について、文献的考察を加え報告する。

6.

診断に難渋した嘔気の一例。

米山 杏南(大森病院研修医), 指導:小松 史哉(総合診療内科)

嘔気・嘔吐を主訴に来院した整形外科通院中の 85 歳女性。次第に食思不振や水分摂取困難となったため来院した。低 Na 血症の診断で輸液療法を行ったが、症状は改善しなかった。他の疾患の可能性を考慮し精査を施行したところ NSAIDs 潰瘍であることがわかった。
嘔気・嘔吐をきたす疾患の鑑別や NSAIDs と消化性潰瘍の関連について文献的考察を報告する。

C. 一般演題(No.7)

7.

高血糖の心血管系に対する急性作用:イソフルラン麻酔犬を用いた発生機序の解明

廣川 佳貴(大学院医学研究科・代謝機能制御系・薬理学)

高血糖による心血管系作用の機序を解析するため、イソフルラン麻酔犬にグルコースおよびマンニトールを投与した(各 3 g/kg/30 min, n=4)。両者は同程度に浸透圧を増加、末梢血管抵抗を減少、房室および心室内伝導を遅延した。前者は後者より 2-3 倍強力に、心拍数および左室収縮力を増加、再分極を遅延した。高血糖の心血管系作用には浸透圧上昇に加え交感神経活性およびインスリン分泌の関与が推測された。

D. プロジェクト研究報告(No.8-9)

8.

シリコンハイドロゲルレンズに付着した汚れと涙液安定性と視機能の関連について

糸川 貴之(大森病院 眼科)

コンタクトレンズ装用者 38 名 76 眼(平均年齢 27.6 歳)を対象に同じ種類のシリコンハイドロゲルレンズ(SiHy)を装用してもらい、レンズに付着した汚れ成分(スクアレノおよびリゾチーム)と涙液安定性および視機能の関連について検討した。視機能および涙液安定性はスクアレノと有意な正の相関を示し、リゾチームと負の相関を示した。SiHy に付着した汚れは、涙液安定性と視機能に影響を与えることが示唆された。

9. **低出生体重児の視覚特性と脳内神経化学物質の検討**

星野 廣樹(佐倉病院小児科)

低出生体重は脳性視覚障害のリスクであり、主因は白質の虚血性変化である。頭頂葉に好発する脳室周囲白質軟化症(PVL)に伴うことが多いが、PVLを呈さない児にも脳性視覚障害を認めることがある。今回、MRI上PVLを認めない低出生体重児を対象に、MRIで評価不能な脳内神経化学物質をMRSにより定量解析した。視覚能力(視覚的注意・視知覚速度・視覚応用)との相関関係を検証し、頭頂葉クレアチンと視知覚速度に負の相関を認めた。

E. **分科会報告(No.10-12)**

10. **Changes in arterial stiffness monitored with cardio-ankle vascular index (CAVI) during hemodialysis therapy**

佐藤 修司(佐倉病院内科学講座循環器内科学分野)

Cardio-ankle vascular index(CAVI)は血圧非依存性の血管弾性指標として開発された。CAVIは、器質的動脈硬化に加えて血管平滑筋の収縮および弛緩による機能的動脈弾性を反映することから、新たな血管機能指標として注目されている。この研究では、透析中の循環動態およびCAVIの変動を観察したところ、CAVI上昇(血管収縮反応)だけでなくCAVI低下(血管拡張反応)という異なる現象が観察された。透析中の循環動態維持におけるCAVIの役割を提示する。

11. **COVID-19 感染予防のための挿管・抜管を経験した一例**

甲斐 沙織(麻酔科)

COVID-19の無症候性ウイルス保持者からの感染を疑わせる報告は存在し、また潜伏期感染をきたす可能性についても考慮すべきであるということが報告されている。COVID-19感染患者への挿管の際は、患者の咽頭からの距離が近くなり、ウイルス量の多い気道分泌物へ暴露されることから飛沫感染のリスクが高いとされる。今回、COVID-19の感染が否定できない際の挿管・抜管を含めた麻酔管理について経験したため報告する。

12. **肺癌術後再発を疑うも縦隔鏡検査にて判明した乳癌縦隔リンパ節転移の1例**

佐々木 彩(東邦大学医療センター大橋病院 外科)

診断目的のツールとして超音波気管支鏡下針生検が施行できないため、原発性肺癌の縦隔リンパ節転移を疑った場合、診断目的に縦隔鏡検査を施行している。2007年11月から2014年12月までに当科で経験した縦隔鏡検査症例は31例で、このうち原発性肺癌縦隔リンパ節転移を疑うも、実際には肺以外の悪性腫瘍から転移したことが判明した症例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告する。

F. **大学院生研究発表(No.13-14)**

13. **アトピー性皮膚炎患者におけるパッチテスト陽性率の検討**

本村 緩奈(生体応答系皮膚科学), 指導教授:石河 晃(東邦大学 皮膚科学講座大森)

アトピー性皮膚炎(AD)患者が接触皮膚炎を起こしやすいアレルゲンに関する本邦報告はなく、当院単施設における5年間のパッチテスト結果を使用して検討する事を目的にしました。抗生剤や防腐剤の陽性率はAD患者が高い傾向にあり、治療薬外用による感作が示唆されました。また重クロム酸カリウム陽性率が低く、AD患者が長期間保湿剤など使用している事で、金属イオンの侵入を阻止し感作されにくい可能性を考えました。

14. **足関節外側靭帯損傷に対する鏡視下 Broström 法と鏡視下 Broström-Gould 法の臨床成績の検討**
- 鮫島 雄仁(高次機能制御系整形外科), 指導教授:池上 博泰(東邦大学医療センター大橋病院)
- 足関節外側靭帯修復術である Broström 法(B 群)と, 下伸筋支帯の一部を腓骨に縫着する Gould 法を併用した Broström-Gould 法(G 群)の臨床成績を比較検討した。両群とも術前に比べ術後の臨床スコアは有意に改善した。術後臨床スコアやアクティビティに関しては有意差を認めなかったが手術時間は有意差を認めた。足関節外側靭帯損傷に対する術式は手術時間や合併症を考慮すると鏡視下 Broström 法のみで十分である。

6 月 17 日(木)

G. 研修医発表(No.15-16)

15. **緩徐進行 1 型糖尿病に縦隔気腫を合併した 1 例**
- 山田 真奈美(大森初期研修医), 指導:佐藤 源記(糖尿病・代謝・内分泌センター)
- 糖尿病性ケトアシドーシス患者に併発した縦隔気腫を,本邦では慣例的に Hammann 症候群と呼んでいる。今回, 嘔気, 嘔吐, 呼吸困難を主訴に当院を受診した糖尿病治療歴のない緩徐進行 1 型糖尿病の 28 歳男性に発症し, インスリン療法と保存的加療により軽快した Hammann 症候群の一例を経験したため,文献的考察を加えて報告する。
16. **胸鎖関節痛を呈しリウマチ性疾患との鑑別を要した感染性心内膜炎の一例**
- 渡邊 芳(大森初期研修医), 指導:山田 壯一(東邦大学医学部内科学講座膠原病学分野)
- 胸鎖関節痛を主訴に来院し, 抗核抗体 40 倍およびリウマトイド因子が陽性のためリウマチ性疾患を疑ったが, のちに黄疸, 貧血が出現し, 血液培養陽性, 経食道心エコーで僧帽弁に塊状エコーを確認し, 感染性心内膜炎(IE)と診断した。IE においては約 47%に抗核抗体陽性, 約 68%にリウマトイド因子陽性, 約 7%で胸鎖関節痛の報告がある。自己抗体陽性の胸鎖関節痛を呈する患者において, リウマチ性疾患の他,IE を鑑別に挙げる必要がある。

H. プロジェクト研究報告(No.17-19)

17. **硝子体手術による網膜下網膜色素上皮細胞懸濁液移植のウサギモデルの確立**
- 高木 誠二(医学部臨床支援室 大森病院眼科)
- ウサギを用いた硝子体手術モデルを作成した。また胎児由来網膜色素上皮細胞を継代培養し細胞懸濁液を作成。硝子体手術では, 実際の臨床研究の条件下で細胞懸濁液をウサギの網膜下に移植を行い, 網膜下での細胞の挙動や術後の経過を観察した。全例で合併症なく硝子体手術が遂行でき, 後部症下剥離を作成できた。術後の観察ではすべての症例で網膜剥離は消失し, 移植モデルが完成した。今後は病理的考察をくわえる。

18. **川崎病類似血管炎マウスモデルにおける Syk 阻害薬の血管炎抑制効果に対する検討—第 2 報—**
浅川 奈々絵(大橋病理)
川崎病は代表的な小児血管炎症候群である。川崎病類似血管炎マウスモデルでは dectin-2-Syk-CARD9 経路の活性化が血管炎発症に関与している。前回の検討で Syk 阻害薬 (R788) の弱い血管炎抑制効果が示唆された(本プロジェクト 19-20)。今回別種の Syk 阻害薬 (GS-9973) を用いて血管炎抑制効果について検討したところ、強力な血管炎抑制効果を認めた。Syk 阻害薬は川崎病血管炎に対する新規治療薬の一候補となり得る可能性が示唆された。
19. **抗 VEGF 受容体阻害薬により作製された未熟児網膜症(ROP)様眼底の血流測定**
富田 匡彦(高次機能制御系眼科学), 指導教授:堀 裕一(東邦大学大森病院)
抗 VEGF 薬を用いる事で ROP 様眼底を呈するラットが作製出来る事が報告され, 今回そのラットを用いて眼血流を測定した。眼血流量は ROP 眼底を呈するラットにおいて有意に高値であり(ROP ラット: 19.0 ± 0.7 , control ラット: 17.0 ± 0.5 , $p=0.002$), また網膜血管蛇行度と眼血流の上昇度に正の相関を示した($r=0.5$ $p=0.0039$)。眼血流の測定が ROP の診断, 眼底像の推測に有用である可能性が示唆された。
- I. **大学院生研究発表 (No.20-21)**
20. **超音波ガイド下脊柱起立筋膜面ブロック(Erector spinae plane block: ESPB)施行時のエピネフリン添加の有無によるレボブピバカイン血中濃度の比較**
茂田 宏恵(高次機能制御系麻酔科学), 指導教授:小竹 良文(大橋・麻酔)
ESPB は血流の豊富な組織へ局所麻酔薬を投与するため局所麻酔薬中毒のリスクがある。今回乳腺手術患者 13 名を対象としてレボブピバカイン (LB) 2mg/kg を用いて ESPB を施行する際にエピネフリン (EP) 添加の有無でランダム化し, ESPB 施行後の LB 血中濃度を経時的に比較した。投与後 120 分まで比較した結果, EP 添加群で LB 血中濃度が低く 12.5 分後で有意差を認めた。両群とも中毒量には至らなかった。
21. **ドライアイによる慢性的な角膜上皮障害における神経因性疼痛の解析**
鄭 有人(高次機能制御系眼科学), 指導教授:堀 裕一(東邦大学医療センター大森病院眼科)
ドライアイと神経障害性疼痛の関連機構を明らかにすることを目的として, 本研究を行った。ドライアイモデルラットにおいて, 角膜過敏および疼痛過敏が発症した。角膜由来の三叉神経核において, グリア細胞の活性化と電位依存性 Ca^{2+} チャンネル $\alpha_2\delta$ サブユニットのタンパク発現量の増加を見出した。そこで $\alpha_2\delta$ リガンドのプレガバリンの持続投与を行ったところ, 角膜過敏と疼痛過敏が減少した。以上の結果から, ドライアイによって神経障害性疼痛を発症する機序を明らかにした。

J. 大学院生研究発表(No.22-23)

22.

自動多項目同時遺伝子検査システムを用いた急性胆道炎 108 例における胆汁内細菌の検討

渡邊 隆太郎(代謝機能制御系臨床腫瘍学),
指導教授:渡邊 学(東邦大学医療センター大橋病院 外科)

急性胆道炎は不適切な抗菌薬治療により重症化しうる。今回、自動多項目同時遺伝子検査システム(Verigene®)を用いて急性胆道炎の胆汁内細菌を評価検討した。胆汁培養陽性患者において、感度は35.7%であった。胆汁内細菌の最大コロニー量が 10^6 CFU/mL 以上の症例では有意に炎症が高く、検出率が増加した(58.1%)。Verigene®システムは急性胆道炎の迅速起病因菌同定における、新たな方法である可能性が示唆された。

23.

ノイズパレイドリアテストを応用した高齢患者のせん妄予測の有用性の検討

橋本裕(高次機能制御系リハビリテーション医学), 指導教授:海老原覚(リハビリテーション科)

今回、ノイズパレイドリアテスト(NPT)がせん妄の予測において有用であるのかを検討した。NPT 実施後、NPT の合計枚数が(せん妄陽性群 3.4 枚 $\pm$ 3.3, せん妄陰性群 1.6 枚 $\pm$ 2.7 $p<0.01$)陽性群で有意に増加した。また、NPT の合計枚数とせん妄陽性率に関しては(オッズ比 1.216, 95%信頼区間 1.026-1.441)となり、NPT の枚数が増えるほどせん妄発症率が上昇することが確認された。

K. 大学院生研究発表(No.24-26)

24.

双胎間輸血症候群における心血管障害と内分泌ホルモンの関連-胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー凝固術例の検討-

村井 裕香(生体応答系新生児学), 指導教授:與田 仁志(新生児学講座)

胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー凝固術 (FLP) 後の一絨毛膜二羊膜性双胎 (MD 双胎) に生じた心血管障害とバイオマーカーの関連を調べた。対象は当院入院の FLP 後 MD 双胎 80 例で、心血管障害の有無で対象を二群に分け、出生時レニン活性、アルドステロン、NT-proBNP、トロポニン T 値を比較した。心血管障害群でレニン活性のみ有意に高く (中央値, 範囲: 102, 13.6-447 vs 51.2, 1.5-320 ng/mL/h, $P<0.01$) , MD 双胎の診療で重要な所見と考えられた。

25.

潰瘍性大腸炎関連腫瘍における癌幹細胞の関与について

中込 英理子(代謝機能制御系臨床腫瘍学), 指導教授:五十嵐 良典(消化器内科)

潰瘍性大腸炎関連腫瘍における癌幹細胞の関与を見るために、UC 関連腫瘍と通常型の大腸腫瘍(腺腫,癌)における CD44v9, CD133, ALDH1A1 の発現を免疫組織化学的に検討した。UC 関連癌では、CD133+/ALDH1A1+の領域が CD133+/ALDH1A1-の領域よりアポトーシスマーカーの発現が低かったが、通常の癌ではこの両者間に有意な差は見られなかった。UC 関連癌と通常の大腸癌とでは、癌幹細胞の性質をもつ細胞の表現型が異なる可能性が示唆された。

26. **慢性房室ブロック(CAVB)モデルを用いた催不整脈リスク評価:包括的 in vitro 催不整脈アッセイ(CiPA)in silico モデルとの比較**
- 後藤 愛(代謝機能制御系薬理学), 指導教授:杉山 篤(薬理学講座)
- CAVB サルを用いて, シサプリド, ソタロール, ベプリジルおよびベラパミルの催不整脈リスクを評価した(各 n=4-5)。TdP リスクはソタロール>ベプリジル・シサプリド>>ベラパミルの順であった。一方, CiPA in silico モデルではベプリジル>ソタロール>シサプリド>>ベラパミルの順と報告されている。両モデル間の TdP リスク評価結果の差は交感神経支配の有無で説明可能と考えられる。

L. **大学院生研究発表(No.27)**

27. **質量分析を用いたマウス脳内におけるモノアミン酸化酵素 B の基質の解析**
- 小畑 洋平(社会環境医療系精神神経医学),
指導教授:桂川 修一(東邦大学医療センター佐倉病院メンタルヘルスクリニック教授)
- 視床室傍核(PVT)や背側縫線核(DR)は気分障害との関連が示唆され, モノアミン酸化酵素 B(MAOB)が豊富に存在するが, これらの脳部位における MAOB の基質は明らかでない。今回, 全身および脳特異的 MAOB ノックアウト(KO)マウスを作製し, PVT と DR を含む複数の脳部位において質量分析を用いたモノアミン測定を行った。KO マウスではフェニルエチルアミンが上昇し, MAOB の基質であると考えられた。

M. **医学研究推進研究報告(No.28)**

28. **酸化ストレス性細胞死抑制因子を指標とした神経変性疾患のバイオマーカーの同定**
- 狩野 修(脳内)
- 酸化ストレスに起因する細胞死を選択的に抑制する末梢血中 neuronal apoptosis inhibitory protein (NAIP) の発現量を解析し, NAIP が筋萎縮性側索硬化症(ALS)をはじめとした神経変性疾患の診断マーカーになりうるかを検討した。結果, ALS 患者群の NAIP 量は健常者群のその約 50%であり, また ALS の運動機能の変化率と NAIP 量に有意な負の相関関係がみとめられた。

6 月 18 日(金)

P. **プロジェクト研究報告(No.31-35)**

31. **間質性肺炎における常在細菌叢の関与機構**
- 山田 善登(膠原病)
- 近年, 間質性肺炎(IP)において肺胞細菌叢による病態制御が示唆されている。今回, 抗菌薬により肺常在菌を減少させた C57BL/6 マウスにブレオマイシン間質性肺炎を誘導し, 抗菌薬未投与群を対照に肺病理組織を検討した。抗菌薬投与群では肺線維化が改善し, IP で見られる 2 型肺胞上皮細胞の細胞老化が抑制された。以上より肺常在菌による細胞老化促進により, IP の病態を悪化させる可能性が考えられた。

32. **肺炎及び虚血性心疾患における病院標準化再入院比の開発について**
大西 遼(社会医学講座公衆衛生学分野)
近年,米国を中心に新たな質指標として病院標準化再入院比が用いられている。今回,肺炎及び虚血性心疾患を対象として,日本における病院標準化再入院比を DPC(Diagnosis Procedure Combination) データから計算した。結果,病院標準化再入院比は病院の特徴を捉える質評価指標として有用であり,ある年度に再入院率が高い病院は翌年度も同様の傾向を示すことが確認された。継続して高い再入院率を示す病院に対し,必要な支援策を検討することが今後の課題である。
33. **ABCG2阻害とインドキシル硫酸の排泄動態からみた新規尿酸降下薬の心血管病予防効果の解明**
小池 秀樹(循環器内科)
尿酸降下薬の ABCG2 阻害率と血中インドキシル硫酸(IS)濃度との相関性を検討する。既存の尿酸降下薬および,新規尿酸排泄促進薬をマウスに腹腔内投与する。その後,ISをマウスに追加投与し,時間毎のIS濃度を測定し,血中IS濃度の推移を検証した。
34. **MRSA 感染症に対する β -ラクタム系抗菌薬の新しい活用法に関する検討**
佐藤 高広 (東邦大学医療センター大森病院 総合診療・救急医学講座)
近年,院内においても市中感染型 MRSA (CA-MRSA)の報告が増えている。CA-MRSA は SCCmec typeIVを保有することが多く, β -ラクタム系抗菌薬に耐性とされているが, β -ラクタム系抗菌薬に in vitro で感性を示すことが多い。本研究では MRSA 臨床株を対象とし,メロペネム負荷により耐性株を作成,次世代シーケンサを用いて全ゲノムを決定し,感性株と比較,抗菌薬感性化の機序を解明する。
35. **薬剤感受性検査標準化のためのカルバペネム耐性腸内細菌目細菌菌株セット構築に関する研究**
青木 弘太郎(微生物・感染症学講座)
ドラフト全ゲノム解析により保有するカルバペネマーゼ遺伝子が明らかな教室保存株からメロペネムの最小発育阻止濃度(MIC)が0.5~8mg/Lを示す8株を選抜した。このうち1株は薬剤フリーの条件で7日間連続継代培養したとき,前後の菌株でメロペネムのMIC値が不変だった。本菌株のカルバペネマーゼ遺伝子はトキシノ-アンチトキシンを搭載するプラスミド上に存在し,脱落しにくいと考えられた。

R. 研修医発表(No.37-38)

37. **ビタミンD欠乏症による低Ca血症によりテタニーをきたした子宮頸癌患者の一例**
伊藤 敬(大森初期研修医),指導医:佐々木 陽典(総合診療内科)
子宮頸癌IVB期の41歳女性。7コースに渡って化学療法を施行されていたが,腫瘍が増大した為,子宮全摘・両側付属器切除を施行され,骨転移に対して放射線治療を受けていた。急性発症の食欲不振とテタニーが出現し,低Ca血症と診断された。精査の結果,ビタミンD欠乏の診断に至り,ビタミンD製剤の内服により改善した。担癌患者では高Ca血症に遭遇することが多い一方,低Ca血症は稀であり,文献的考察を加えて報告する。

38. **硬性気管支鏡下に切除した左主気管支腺様嚢胞癌の一例**

溝口 敬基(大森初期研修医), 指導:坂井 貴志(呼外)

症例は 50 歳代男性。咳嗽を主訴に近医受診, 気管支喘息の診断で加療されたが改善せず, 胸部 CT で左主気管支内腫瘍を指摘され, 当科紹介となった。腫瘍は左主気管支入口部に位置する径 20mm 大の病変であり, 生検の結果, 腺様嚢胞癌と診断された。腫瘍の組織型, 進行度, 部位, 全身状態を考慮し, 硬性気管支鏡下腫瘍切除および放射線照射の方針とした。

S. **大学院生研究発表(No.39-40)**

39. **食道癌における治療前血清 CYFRA21-1 の予後因子としての意義(多施設共同研究)**

石岡 伸規(臨床腫瘍学), 指導教授:島田 英昭(一般消化器外科学講座(大森))

多数症例での食道扁平上皮癌患者における CYFRA21-1 の予後的意義を検討した報告は少ない。多施設共同研究として治療前 CYFRA の臨床病理学的因子との関連・予後因子としての有用性を検討した。手術先行群 412 人, 術前化学療法群 486 人, 術前化学放射線療法群 149 人が登録された。手術先行群及び術前化学放射線療法群では CYFRA 陽性患者は有意に予後が不良であった。多変量解析では術前化学放射線療法群において CYFRA 陽性が独立予後不良因子であった。

40. **側方注視による音像定位変化の年齢による影響**

三澤 建(高次機能制御系耳鼻咽喉科学),
指導教授:鈴木 光也(東邦大学医学部耳鼻咽喉科学講座(佐倉))

空間識による音像定位は眼位の干渉を受けるが加齢の効果は明らかでない。本研究では年齢による干渉効果について検討した。男性 8 名・女性 26 名を対象とし両耳間時間差像移動弁別閾値を測定した。測定中は 0 度, 左右 30 度を注視させた。若年齢群と中高年齢群に分けて振幅と中心軸偏倚を比較した。右左注視時に中高年齢群で中心軸偏倚が有意に増大した。これは音像定位に対する眼位の干渉効果が中高齢者で大きいことを示唆している。

T. **大学院生研究発表(No.41-45)**

41. **小児がん経験者の晩期内分泌合併症に関する検討**

花川 純子(社会環境医療系衛生学)
指導教授:西脇 祐司(社会医学講座衛生学)

小児がん経験者(Childhood cancer survivors,以下 CCS)は, がん自体やがんに対する各種治療により, さまざまな晩期障害を併発し, なかでも内分泌機能障害を高頻度に合併する。単一の小児専門施設で治療を受けた CCS 患者における造血幹細胞移植後の晩期内分泌合併症の現状を解析し, その頻度および危険因子について検討した。

42. **肝細胞癌細胞株における DPYD 遺伝子の低酸素模倣剤 DFO による転写制御機構の解明**
- 渡邊 剛(代謝機能制御系消化器内科学),
指導教授:五十嵐 良典(東邦大学医療センター大森病院 消化器内科)
- 我々は以前に Sorafenib が DPYD の発現低下を通じて 5-FU の抗腫瘍効果を増強することを報告した。今回、腫瘍微小環境における低酸素環境下での DPYD の発現をヒト肝細胞癌細胞株および DFO を使用し in vitro で調査した。低酸素環境下では低酸素誘導因子 HIF を通じて DPYD の発現が亢進することを確認するとともに、HIF 結合部位を含むレポータープラスミドを構築することで転写増強に関わる標的遺伝子を特定した。
43. **18F-FDG PET/MRI による肺癌患者の有用性評価**
- 橋本 亜希子(生体応答系放射線医学),
指導教授:五味 達哉(東邦大学医療センター大橋病院放射線科)
- 非小細胞肺癌患者において 18F-FDG PET/MRI および thin-slice CT による臨床病期分類の有用性や病理学的評価との一致性に関する評価は明らかでない。今回、18F-FDG PET/MRI および CT による臨床病期分類と病理学的病期分類との一致性および患者の術後生存率への影響を検討した。18F-FDG PET/MRI を用いた病期分類は Stage I と Stage II 以上の区分において CT よりも優れている可能性が示された。また 18F-FDG PET/MRI による病期分類は病理学的病期分類と同等の患者予後予測能をもつことを確認した。
44. **Prognostic impact of CEA/CA19-9 at the time of recurrence in patients with gastric cancer**
- 森山 仁(代謝機能制御系臨床腫瘍学),
指導教授:島田 英昭(臨床腫瘍学講座)
- 胃癌術後再発時 CEA/CA19-9 陽性率と再発後予後の関係について検討した。CEA/CA19-9 とともに再発時陽性率は、術前より高く(CEA,56%vs24%;CA19-9,37%vs15%),肝・リンパ節再発で,CEA 陽性率が(肝,58%vs8%;リンパ節,75%vs35%),腹膜播種再発で,CA19-9 陽性率が高かった(41%vs14%)。リンパ節再発時 CA19-9 陽性例は、有意に再発後予後不良であった(P=0.005)。
45. **血液透析患者の疲労に関連する病気認知**
- 種本 陽子(社会環境医療系心身医学),
指導教授:端詰 勝敬(心療内科)
- 疲労は透析患者の QOL 低下を招き、病気認知は透析患者の QOL に影響する。今回、透析疲労と病気認知の関連を質問紙調査により検討した。疲労のある透析患者の多くはアレキシサイミア傾向があり感情を身体化し疲労として表出している可能性、また腎不全をネガティブに捉えてストレスや悩み・過去の不十分な医療処置と関連付ける傾向があった。そしてこの病気認知と疲労を理由とした身体的な日常役割機能制限の関連が示唆された。